

19 世紀から 20 世紀前半のフランスにおける「日本」のイメージ形成 —「サムライ」を中心に—

La Formation de clichés sur le Japon en France du 19^e siècle à la première moitié du 20^e siècle:

En cas du « Samourai »

山崎 ゆき子

YAMAZAKI Yukiko

1. はじめに

海外の人々が、「日本」や「日本人」からイメージするものは、数多くあるだろう。それらのイメージは日本の文化や社会を象徴するものとして、広く拡散し、多くの人々に共有されている。しかし、それらは、日本人が実際にその事柄や行為から抱くイメージとは必ずしも一致していないと感じることは、よく経験することである。筆者は他の論考¹で、19 世紀後半から 20 世紀初めにかけて、フランスの人々が日本を象徴する慣習・文化のひとつとして捉えた「ハラキリ *hara-kiri*」について、そのイメージがどのようなものであったのか、また、それがどのように作り上げられ、浸透していったのかを考察した。そこで明らかとなったのは、日本人が抱くものとはかけ離れた「ハラキリ」のイメージであった。そして、そのイメージの形成や浸透には、報道や日本人自身によるイメージの流布、辞書の記載内容など多様な要素が複合的に関与していることも明らかとなった。

では、「ハラキリ」の行為者である「サムライ」は、どうなのだろうか。「サムライ」といえば、日本男性を象徴するもののひとつと、世界的にみなされていると言えるだろう。しかし、私たち日本人と海外の人々が抱くイメージは同じなのだろうか。現代の私たちが「あの人はサムライだ」などと言うとき、それはどのような意味なのだろうか。広辞苑第七版(岩波書店、2018)によれば、「なかなかの人物」という意味が記されている。大辞林第三版(三省堂、2006)では、「相当な人物」「気骨のある人物」となっている。すなわち、この語彙は日本の歴史の中で「サムライ」が占めてきた社会的立場や体現してきた精神及び規範をバックグラウンドとして、現代においても尊敬の念を起させるような意味合いで捉えられ、用いられていることがわかる。このような捉え方は、フランスでも同じなのだろうか。例えば、1967 年にフランスで制作された映画にアラン・ドロン主演の『サムライ』*Le Samourai* という作品がある。時代は現代、舞台はフランス・パリ、そして、この「サムライ」とは主人公につけられたあだ名であり、彼は金で雇われた殺し屋である。たとえこの主人公の生き方がどのようなものであろうと、「サムライ」が殺し屋であるという設定に、フランス人が「サムライ」から想起するイメージを見ることは容易だろう。これは、日本人がこの言葉に抱いているイメージとは異なるのではないだろうか。

フランスでのこのイメージは、いつごろ、どのようにして形成されたのだろうか。その形成過程は、「ハラキリ」と同様なのだろうか。本稿では、フランスにおける「サムライ」のイメージについて、19 世紀から 20 世紀前半にかけて、新聞などを中心に当時の資料の分析を通して、「ハラキリ」との比較も念頭に置きながら、そのイメージの形成と変化、および浸透について考察していきたい。というのも、そこから、異なる文

化が理解されていくメカニズムとそこに潜む問題の一端が浮かび上がってくると思われるからである。

2. 幕末維新の混乱の中で

日本人についての記述がフランスの文献に頻繁に登場し始めるのは、1860 年代からである。これは、1858 年に日仏修好通商条約が締結され、両国の本格的な交流が始まるからである。では、「サムライ samurai²」という語は、日仏交流とともに用いられるようになったのだろうか。

19 世紀後半のフランスでは、印刷技術の革新により、新聞が次々と創刊され、各紙は競ってさまざまな情報を人々に伝えた。そのような情報の中に、日本に関するものも含まれていた。このような新聞の中から、週刊挿絵入り新聞『イリュストラシオン』*L'Illustration*³や『ル・モンド・イリュストレ』*Le Monde illustré*、フランスで最古の一般紙『ル・フィガロ』*Le Figaro* の日本に関する記事を追ってみよう。これらの新聞の中で、「サムライ」という語が最も早く用いられているのは、『ル・モンド・イリュストレ』である。1861 年 3 月 30 日号に、江戸でのフランス公使館門番襲撃事件の様子を詳細に報じた記事がある。その中で、襲撃犯を「サムライ、すなわち大名の役人 un samourai, officier de daïmio」と記している。この記事の中では、他の武士については「役人 officier」のみで記し、犯人のみを「サムライ」と記し区別している。しかし、「サムライ」についての具体的な説明は記載されていない。また、この新聞では、この事件を「説明のつかないような暴力行為」と評し、さらに襲撃の様子を描いた全面の挿絵が掲載されている。このようなことを総合すると、この記事からは、「サムライ」は「役人」ではあるものの、「幕府の方針に従わない非常に暴力的な人物」という印象を受けることになる。

『ル・モンド・イリュストレ』にはこの記事以前にも、1857 年から日本人に関する記事が掲載されており、武士に関わるものとしては、1860 年の日米修好通商条約批准のための遣米使節団の記事がある。しかし、この時の表記は、「大使 ambassadeur」である。また、『イリュストラシオン』においても 1847 年から記事が掲載され、幕府などの役人の記述もあるが、表記は「役人 officier」が一般的で、ほかには、この語に「上級役人 grand-officier」などのように修飾語をつけて記されており、「サムライ」の語は用いられていない。

さて、前述の 1861 年の『ル・モンド・イリュストレ』の記事の後は、どうなのだろうか。この記事の後は、「サムライ」はどの新聞にもしばらく登場しない。次に現れるのは、1868 年になってからである。この年は、開国に反対する武士たちの盛んな攘夷運動を背景に、フランス人水兵が負傷させられるとともに外国公使が襲撃された神戸事件、およびフランス人水兵 11 名が殺害された堺事件、そしてイギリス公使パークス一行が京都で天皇に謁見するところを襲撃された事件などが起きている。各紙がこれらの事件を報じたが、なかでも 1868 年 6 月 13 日号の『ル・モンド・イリュストレ』は注目に値する。2 月に起きた堺事件とイギリス公使パークス一行襲撃事件を報じた記事のなかで、「サムライ」という語が用いられているからである。堺事件は土佐藩士にフランス人水兵が殺害された事件であるが、この前年に起きた長崎でのやはり土佐藩士によるイギリス人水兵襲撃事件にも触れながら、彼らを「サムライ」と記している。この記事の中では、一般的な警護の武士を指す場合にはわずかな例外はあるものの大半は「役人 officier」が用いられ、逆に襲撃犯を指す場合には「サムライ」が繰り返し使われている。前述の 1861 年の記事と比べれば厳密ではないが、やはり、読者は「サムライ」とは「幕府の方針に従わず外国人を襲撃する暴力的

な者」という印象を受けると言えるだろう。さらに、パークス一行襲撃事件と堺事件の襲撃の様子を描いた挿絵が、それぞれ表紙と裏表紙に大きく掲載され、見る者に強いインパクトを与えており、上記の印象を一層強めている。

ところで、この記事には、さらに注目すべき特徴がある。それは、まず、「サムライ」の後に「刀を2本差した人々 *gens à deux sabres*」という説明が加えられ、特徴が示されている点である。次に、襲撃犯たちに課せられた処罰の記述の中で「ハラキリ *hara-kiri*」の語が用いられ、詳しい説明が加えられている点である。すなわち、この記事において、初めて「サムライ」は刀を2本持っている人物であり、その人々はその刀で人を殺し、加えて「ハラキリ」をする、ということが明確に示されたのである。この記事の記述内容とその挿絵によって「サムライ」は「極めて暴力的で残忍」という印象を一層強固なものにしたと言えることができる。

他の新聞も見てみよう。『ル・フィガロ』は1868年4月25日号で堺事件の速報記事を掲載し、襲撃犯については「大名たちの兵士 *soldats des daimios*」と記している。また、パークス一行襲撃事件は、『イリュストラシオン』(1868.6.6)でも報じているが、襲撃犯は「悪漢 *bandits*」、一行を先導していた中井弘蔵については「上級役人 *officier de haut rang*」で表記し、「サムライ」の語は用いていない。しかし、一行を襲う武士たちの挿絵が大きく掲載されている。

このほかの外国人襲撃事件に関しては、同じく1868年に起きた神戸事件を『ル・フィガロ』(1868.5.20)と『イリュストラシオン』(1868.5.30)が報じている。『ル・フィガロ』の記事では、「自らの腹を切り開く *s'ouvrir le ventre*」という言いかえつきではあるが、「ハラキリ *Harakiri*」という語が用いられている。「ハラキリ」については、「自らの腹を切り開く」という表現では『ル・フィガロ』を中心に1864年5月1日号からたびたび新聞には出ている⁴。しかし、「ハラキリ *harakiri*」という語彙が新聞で初めて用いられたのは、1868年5月20日のこの記事のようである。ただし、この記事の中では「サムライ」は用いられておらず、首謀者の滝善三郎は「役人 *officier*」とされている。『イリュストラシオン』5月30日号でも同様に、「ハラキリ」は用いられているが、「サムライ」という語は用いられていない。

このように見てくると、「サムライ」という語は、フランスの新聞では日本社会の混乱期に用いられ始め、使用場面は外国人襲撃犯と密接に関連付けて用いられていたとすることができるだろう。また、それによって「サムライ」は「暴力的で残忍」という印象を読者に与える結果となっていたとすることができる。ただし、この語は特定の新聞の中で限定的にしか用いられていない。すなわち、この語の使用頻度は、「ハラキリ」あるいは「ハラキリ」を意味する「自らの腹を切り開く」という表現に比べはるかに低い、ということも留意しておく必要があるだろう。

ところで、「サムライ」という語の使用頻度の低さはなぜなのだろうか。この語は日本においては、当時、とくに珍しいものではない。平安時代から使用され、江戸時代には士農工商の身分制度のなかで「士」の身分を表していた。したがって、一般に使われていた言葉である。しかし、幕末、日本とフランスの交流がようやく始まったころ、日本を訪れるフランス人は、交渉など何らかの職務を担った者たちであった。したがって、日本側で彼らの対応をしたのは、たいていは幕府の役人であった。彼らは「サムライ」であるが、職務上の対応である以上、呼称は「サムライ」というよりは役職を用いていたであろう。とすれば、幕末の日本に関する記事では、「役人」や「大使」を示す語が多く用いられ、「サムライ」は使用頻度が低く、ま

た、その実態についての把握も困難だっただろう。

さて、時代が変わり明治になっても状況に大きな変化はあまり見られない。しかし、「サムライ」という語がわずかながら知られるようになってきたことがうかがえる。というのも、例えば、1874年10月30日号の『ル・フィガロ』には、「秋田のサムライ、タカセ ヒデチカ」という青年の話が掲載され、「サムライ」は言いかえなしで用いられているからである。ただし、内容は「外国人が天皇に災いをもたらしていると、夢で神から示されたため、通りがかった外国人に刀で襲いかかり八つ裂きにした」というものであり、相変わらず「サムライ」には「外国人を襲撃する暴力的で残忍」というイメージが付されている。

しかし、このあたりを境に「サムライ」のイメージに少しずつ変化が現れる。使用頻度という点においても、以前に比べると徐々に高まってくる。『イリュストラシオン』では、1874年11月28日号から1875年3月13日号まで、幕末維新の日本を舞台にした『ショッコ』という小説が連載され、「高貴な人々」「二本差しの空威張りする人々」(1874.11.28)、「金の柄のついた2本の刀を持つ」(1875.1.9)などの説明がつきながら、「サムライ」が、時々登場する。『ル・フィガロ』でも同様に、「大領主」(1875.1.14)や「かつての貴族」(1875.9.13)という言いかえ、「パリに住む裕福な最上級貴族のサムライ」(1875.9.21)などの表現で登場するようになる。

とくに、1876年から九州や萩で起きた暴動や77年の西南戦争を報じた記事は目を引く。そこでは「サムライ」が言いかえなく用いられているだけではなく、詳細な説明が付されているからである。九州でのこれらの動きをいち早く報じた『ル・フィガロ』1876年12月25日号には、次のような記述がある。

周知のようにサムライたちはかつて特別な軍事階級を形成しており、特権をいくつか享受していたが、今ではそれを奪われている。サムライたちは以後、不満分子の強力な集団を形成し、このほど口火を切った。

この続報(1877.2.9)は、「数名の反乱者たちは、古い家柄の貴族たちで、死刑執行人に触れられて自らの体が穢れるのを望まなかった」と記し、続けて朝野新聞から次のような記事を転載している。

熊本で蜂起した4人のサムライは、10月24日に逃れ、自らの腹を切り開くために、ヨネムラの家を集まった。しかし、自死の前にあたかも祭りの日であるかのように酒を飲み、踊り始めた。(中略)しかし、日が沈むと、彼らは日本の古式の儀式用の装束を身につけ、神に祈った後、自らの腹を大きく切り開いた。

ここに記された「サムライ」は、反乱者ではあるものの、以前の単なる乱暴者、「外国人を襲う暴力的で残忍な人物」というイメージは影を潜めている。旧体制を担ってきた上層階級に属した者たちであるとともに、新たな時代の制度の下で新体制に抵抗し旧体制を体現する人物として描かれている。

一連のこの出来事については、1878年1月5日号の『ル・モンド・イリュストレ』にも記事が掲載されているので、見てみよう。この新聞では、まず何よりも目を引くのは、全面で掲載された「日本での最後の反乱の首領たち」という題のイラストである。そこには軍服姿の西郷隆盛を中心に、共に参加した元陸軍

少将の篠原国幹や桐野利秋なども含め全員が甲冑姿の武士として描かれており、強い印象を与えている。そして、次ページに、「日本での最後の反乱」と題された記事が掲載され、全体で1ページのはぼ3分の2を占める分量となっている。この中でも、「サムライ」は言いかえなしで用いられている。幕末維新の経緯の中で長州や土佐の改革の立役者であり推進者である木戸孝允や板垣退助、大隈重信などを「かつてサムライであった」と記している。同時に、蜂起した薩摩藩の人々について、「戦士の伝統に忠実」と説明し、政府内での意見の対立から「辞職や引退に追い込まれた西郷隆盛や桐野利明や篠原国幹そして天皇の衛兵の大半の将校と兵士」を「薩摩地方のサムライたち」と記している。さらに、反乱軍側は自分たちを「勇敢なサムライ」であり、また、政府軍の「将校の多くもまたかつてはサムライだった」と考えていた、としている。この記事では「サムライ」は、2つの意味で用いられていることがわかる。すなわち、旧体制下での身分としての「サムライ」と、新体制になってもそれを受け入れず旧体制を体現しかつ武力に訴える者としての「サムライ」である。先に触れた西郷隆盛たちの全面的イラストは、そのいでたちから後者の「サムライ」を強調し、強く印象付ける役割を果たしている。

このように見てくると、70年代には「サムライ」について上記2種類のイメージが併存するようになったとすることができるだろう。

3. 「日本」の流行とともに

1880年代になると、以前からすでにその兆しを見せていた「日本」流行は、78年のパリ万国博覧会によって、大きな広がりを見せる。事実、この時期から日本の美術品収集家や美術商たちが多くの著述を出版するようになる。日本愛好家のエドモン・ド・ゴンクールはとくに有名であるが、ほかにも、『日本芸術』(1883)を執筆したルイ・ゴンズ、ゴンクールらとともに『芸術の日本』(1888~1891)を出版したフィリップ・ビュルティなどを挙げることができる。また、日本を舞台にした文学作品もこの時期に登場し始める。なかでもピエール・ロチの『お菊さん』(1885)は一大ブームを巻き起こし、1893年には劇化され上演された。このような「日本」流行の状況について、『ル・フィガロ』1885年1月19日号は次のように記している。

これ[ジャポニスム]はもはや、ほかのものと同じような一時的な流行ではなく、簡単には消えない持続的な趣味である。それはすべてを覆い尽くし、すべての階級に浸透し、いわば油のシミのようにじわじわと浸透している。

そして、このような流行の中で「フランス人の家には日本の様々なものが飾られ、その中にはサムライの甲冑などもある」、と記事は続けている。この記事の中では、「サムライ」は言いかえなしで用いられている。「サムライ」という語は80年代、この記事に見るように、ジャポニスムの流行に伴って登場することが多くなる。すなわち、「異国情緒を掻き立ててくれる遠い国の人々と文物」という文脈の中で用いられるようになる。

例えば、エドモン・ド・ゴンクールは、1881年出版の『ある芸術家の家』第1巻で、自らの浮世絵コレクションとともに、1871年にイギリスで出版されたミットフォードによる『昔の日本の物語』を参照しながら、「忠臣蔵」を「サムライ」、「ハラキリ」という語を交えて2ページにわたり紹介している⁵。加えて、第2巻では、

自らのコレクションの脇差について詳しい説明をしている個所で、日本について「サムライすなわち2本の刀を差した騎士たちの国」と表現している⁶。

1889年にはピエール・ロチが、「サムライたちの墓で」というエッセーで、「忠臣蔵」のあらすじを記しながら、自らの泉岳寺詣での思い出を綴っている。彼は、その中で「昔、子どものころ、貴重な手稿本でこの《47人の忠実なサムライたち》の物語を読み、この騎士道の英雄たちに夢中になった⁷」と記している。そして、次のように続けている。

この物語は、詳細を知っている者にとっては、非常に美しいのだ。ヒロイズムと極端なまでの名誉と、人間を超越した忠誠心で非常に感嘆させるのだ！（中略）この物語は騎士道の高貴で偉大な過去についての考えを思い起こさせる。⁸

「忠臣蔵」は、「古き良き日本」を象徴する物語として、この時期、折に触れ紹介される。歴史学者ラ・マズリエールによる『日本史論』にも登場している。この歴史書では、あらすじが2ページにわたり紹介⁹され、主君に対する忠義が強調される。さらに、この歴史書は「武士」や「武士道」について、「サムライ」や「騎士道」という語を用いながら、説明を展開する。少し例を挙げてみるならば、「サムライたちは、その仕事や出自がいかに多様であろうと、騎士道的な名誉にかかわる唯一の規範を忘れない」（pp.239-240）、「2本の刀を差すことがサムライを作り上げるのではない」（p.240）、「サムライは騎士道の5つの掟を守る」、「サムライはストイックな勇気を自分自身に与える義務がある。そしてこの勇気は、苦痛や死をものもしないという形をとる」（p.241）などの記述がある。また、このような説明を展開するにあたり、著者は、逸話や歌舞伎などの例を交えて、その美点や特質を示している¹⁰。このような形で言及される「サムライ」は、封建時代の上層の身分であるとともに、フランスの昔の騎士道物語の英雄たちに重ねてイメージされている。

ところで、このような変化はなぜ起きたのだろうか。それを知るには、当時、ジャポニスムの流行に伴って、フランス社会に流布していた工芸品に目を向けてみる必要があるだろう。1867年のパリ万国博覧会を機にすでに始まっていた「日本」流行の兆しから、日本政府は日本の工芸品が高い評価を得ることを確信していた。そこで、78年のパリ万国博覧会に合わせて、その輸出を目的に、すでにアメリカを相手に半官半民で設立していた工芸品制作・輸出会社「起立工商会社」の支店をパリにも設立した¹¹。そこで扱われたのが、高い技術で制作された、「日本」をアピールする品々であった。また、それ以外の民間の貿易会社もヨーロッパ向けに制作した品々を販売した。そのような工芸品にあしらわれた異国情緒溢れる「日本」を感じさせる図柄としてよく用いられたものの中に、「サムライ」がある。現在、ヨーロッパに保存されている工芸品を見ると、この図柄は、刀を差し、具足をつけ弓矢などを持っている武将の姿で現されていることが多い¹²。このような工芸品は当時盛んに輸出され、グレゴリー・アーヴィン氏によれば、ヨーロッパの美術館、個人蒐集家、一般大衆はこぞって買い求め、70年代頃から90年代初めまでの間、それらは日本輸出全体の1割を占めるほどであった¹³。「サムライ」という語彙と遠い国の現実感のない武将姿のイメージは、ジャポニスム流行の波に乗って輸出されたこのような品々によって拡散されていったと言えるだろう。

また、日本国内では 90 年代になると、外国人旅行者向けに、写真スタジオで盛んに土産用の写真が販売されるようになり、旅行者たちはそれを買って自国へ持ち帰った。ジェローム・ゲスキエール氏によれば、フランスのギメ・アジア芸術博物館に多数所蔵されているこれらの写真の多くは、「ステレオタイプによる住民の様々なカテゴリー（サムライ、花魁、芸者、行商人）、あるいは、スタジオで再構成された伝統的なあらゆる職業」が被写体となっている¹⁴。事実、前述したラ・マズリエールによる『日本史論』に掲載されている「サムライ」や「ハラキリ」の写真は、明らかにスタジオで撮影されたものである¹⁵。このような写真は、ジャポニスムの流行によって意識に刷り込まれた異国情緒あふれる特定の「日本」を求める外国人の需要に合わせて、日本人が商業上の利益のため大量生産し、販売したものである。そしてそれがさらに、本来の姿ではない「日本」を拡散させる役割を果たしたとすることができる。

すなわち、ジャポニスム隆盛の時代、西洋の騎士道と重ね合わされた遠い夢の国「日本」の「サムライ」のイメージは、フランス人たちによってのみ作り上げられたわけではないのである。その流行を利用して何らかの利益を得ようとする日本側の官民挙げての行動とフランスでの流行の動きとの相乗効果によって作り上げられ、広められて、固定化されていったのだということがわかる。

では、このようなジャポニスムの大きなうねりの中、「外国人を襲う暴力的で残忍」という「サムライ」のイメージは消えたのだろうか。1882 年に出版された小説『ハラキリ』¹⁶は、その答えを知る手がかりを与えてくれる。この作品の結末は、維新で没落した元大名とその友人が、すべての要因は日本にやって来た外国人にあると考え、「唐人に死を！」と叫んで、一方はハラキリをし、もう一方は外国人たちを襲った後、死ぬ、というものである。作品の中で、この二人はともに「サムライ」と表記されている。作品のこの部分は、『ル・フィガロ』(1882.8.26)にそのまま掲載されている。なお、「サムライ」にはとくに詳しい説明は付されていない。

さらに、1891 年 5 月 15 日号の『ル・フィガロ』での大津事件を報じる記事も手がかりとなる。この記事では、ロシア帝国皇太子を斬りつけた警察官について、「殺人者はサムライの一派に属している」と記している。ここには、外国人を襲撃するのは「サムライ」であるという固定観念を見ることができる。実際、この記事に対して、東京専門学校の家永豊吉は「日本は、相変わらず、外国人に対し憎しみの感情で動かされる、20～30 年前の国」という誤った判断を与えると、『ル・フィガロ』編集部に抗議する文章を送っている¹⁷。この事件については、『ル・プチ・ジュール：シュブレマン・イリュストレ』 *Le Petit journal : Supplément illustré* (1891.5.30)でも記事とともに、犯人が刀を振りかざして斬りつけようとする場面の挿絵を掲載している。

また、1895 年に出版された『虹一新日本の小説』においても、襲撃犯津田三蔵が登場人物の一人となっており、大津事件に言及している。ところで、この小説は、1885 年の日本を舞台に西欧化で変わりゆく状況を題材に扱ったとするものだが、この中には、大津事件以外にも西欧化を妨害しようとする様々な企てが虚実織り交ぜて描かれる。その首謀者は、表向きは海軍の要職に就き、西欧化する社会の中で何食わぬ顔をして生きている。しかし、謀議の際には、「帯に刀を 2 本差し、サムライのいでたち」で登場する¹⁸。そして、その時の彼の様子について、「自らもその生き残りの一人である消えた貴族たちの恨み」が体現されているようだ¹⁹、と描写されている。この例の中に出てくる「サムライ」は、新体制に反発し旧体制を体現する暴力的な者としての「サムライ」である。

ここに挙げた小説2作品で示される「サムライ」のイメージは、すでに見たように70年代に新聞などで盛んに報じられたものと重なる。ここには、70年代に作り上げられたフランス人の固定観念を見ることができよう。また、それに加えて、小説作品が創作されるには、ある時代的な背景を含む場合には、それが起こってから一定の時間を要するため、少し前のイメージが遅れて発信されるということにも起因すると思われる。この「遅れ」は、イメージの拡散という点から考えると、見逃すことのできない役割を持っている。というのも、新聞は新しいことを早く伝えることを使命とする。したがって、新聞による情報は一過性であり、そこから発信されるイメージも一過性である。しかし、文学作品などによって提供される情報は一過性ではない。長期にわたって多くの人々に読まれることによって繰り返しイメージを発信し、持続的に作用するからである。創作に時間を要するものは、すでに過去のものとなっているイメージを、時間をおいて再生産し、さらに新聞よりもはるかに継続的に拡散させる機能を果たすことになるのである。

このように見てくると、ジャポニスム全盛期での「サムライ」のイメージは、本来の姿というよりは、「異国情緒を掻き立ててくれる遠い国」と結び付けられ、ヨーロッパの遠い昔の騎士と重ね合わされたものが大勢を占めているが、一方で、かつての「暴力的で残忍なイメージ」、「外国人を襲撃する」イメージ、すなわち、「刀を2本持って振り回し、人を殺す」イメージも消えることなく底流に根強く存在し、かつ、時間差で記された著作などにより拡散されていたことがわかる。ただし、どのイメージにも、「サムライ」は上流階級に属し旧体制に強く結びついた者だということは、この時期には前提になっている。

4. イメージのさらなる変容へ

1895年前後から新聞などでは「サムライ」への言及が増してくる。というのも、1894年7月から日清戦争が始まり、戦果を挙げる日本を各新聞が取り上げ始めるからである。そしてこの出来事は「サムライ」のイメージにも影響を与え始める。『イリュストラシオン』1894年8月18日号ではいち早く、日本陸軍育成でのフランスの貢献に関する記事が掲載される。この記事は、フランスの貢献により、「日本の軍隊が西欧化し、かつてのサムライたちの精神や戦術は消えた」と記した後、「サムライたちの戦士集団 *les bandes guerrières de samourais* に基づいた、大名たちのこの封建的な社会」、「戦士精神 *l'esprit guerrier* を軍事精神 *l'esprit militaire* に替えなければならない」、「日本の戦士 *guerriers japonais* が生まれながらに持っていた美点」などの表現を用いながら、日本の軍隊の特徴を述べている。これらの「サムライ」に関する部分の表現に着目してみると、今まで見られなかった特徴があることに気づく。それは、「サムライ」を「戦士 *guerrier*」と言いかえている点である。この記事では、「サムライ」は封建社会に結びついたものとして表現されているが、「戦士」での言いかえは、これ以後頻繁に現われる。とくに、『ル・フィガロ 文芸版』1894年9月24日号に掲載された「日本の女性」と題されたモトヨシ・サイゾウの署名入り記事では、「サムライ」を「戦士」と言いかえている。この言いかえは、日本人による説明であるだけに、影響力があっただろう。『イリュストラシオン』(1895.11.16)でも、「戦士」での言いかえを用いている。

ところで、「戦士」とは当然のことながら、「戦うことを専門とする者」であり、それは、「人を殺す」ことを前提としている。「戦士」と言いかえることにより、「サムライ」という語が本来内包する社会的・文化的な背景は失われ、極めて一面的なイメージが提示されることになる。すなわち、ここに、イメージの変容が起き始めたと考えることができるのである。

ここで、フランスで刊行された辞典への記載状況にも目を向けてみよう。19 世紀後半、とくに日仏の交流が始まったところからの語彙を収録しているのは、ラルース社から 1866 年から 1877 年にかけて刊行された『19 世紀大百科事典』*Grand dictionnaire universel du XX^e siècle* (全 17 巻) であるが、この事典には「サムライ」は収録されていない。この語が初めて辞典に項目として登場するのは、1898 年刊行の百科事典を兼ねた挿絵入り大辞典『ル・ヌーヴォー・ラルース・イリュストレ』*Le Nouveau Larousse illustré* (全 7 巻) である。国語辞典部分に、「日本の戦士階級の古い呼称」という説明が記載される。そしてその下の百科事典部分に、12 世紀以前とその後の役割、および最も重要な特権として「年金」「二本差し」「自決する権利」が挙げられている。帯刀については「1876 年まで続いた」、というカッコ書きの注が付けられている。これは、ジャポニスム流行の波に乗り、「サムライ」をあしらった工芸品や写真が盛んにフランス社会でもてはやされた頃とちょうど一致する。ただし、すでに「戦士階級」という表現が用いられていることには注意したい。既述したとおり、ジャポニスム流行の時期には、「騎士」という言いかえも使用されていた。しかし、辞典での説明は、初出の時から「戦士」が用いられていることになる。「騎士」と「戦士」では、イメージされるものは全く異なるだろう。また、日清戦争あたりから用いられ始めた「戦士」という言いかえにより、この語が喚起するイメージの変容が起き始めたことはすでに述べたが、辞典の説明はまさにその変化が反映されたものであることがわかる。さらに、辞典の説明に「戦士」という語が記載されたことで、この言いかえが定着していくことになり、変容したイメージの拡散に関与していくことにもなるだろう。

なお、この辞典には、「ハラキリ」も初めて掲載されている。「ハラキリ」「サムライ」ともに、同じような扱いであり、その記載状況を見ると、この辞典が編纂された時点では、「サムライ」という語彙は、「ハラキリ」とほぼ同程度にフランス人の間で広まっていたと考えることができる。

5. イメージの固定化

1904 年以降は、さらに「サムライ」が用いられる頻度が増す。1904 年から 1905 年に日露戦争が行われるからである。日清戦争に対しては、挿し絵入り新聞『ル・プチ・ジュルナル: シュプレマン・イリュストレ』の記事が記しているように²⁰、「野蛮人同士が戦っている」との認識であり、「ヨーロッパはほとんど無関心だった」。しかし、この戦争はアジアの日本とヨーロッパの一員であるロシアとの戦争であったため、各新聞は連日戦況を報じている。さらに、予想外な戦況が続いたため、戦況報告に加えて、特派員などによる論評記事をたびたび掲載しており、そのような記事の中で、「サムライ」は繰り返し登場してくる。

日露戦争開始直後の『ル・モンド・イリュストレ』1904 年 2 月 20 日号に掲載された記事「ロシア人と日本人」を見てみよう。この記事では、日露戦争に関連し、1900 年の義和団事件をもとに両国を比較分析している。この事件の際の日本人の特徴を、「激高しやすく、(中略) 血気にはやる。行動的、がむしやら、肉体と同様に精神も機動性に富み、けた外れの自尊心を持つ」「常軌を逸した、向こう見ずな勇敢さを持つ」と描写した後、次のような記述が続く。

先祖から受け継いだ遺伝的特性(中略)、そして二本差しのサムライたちの血の名残なのだ。—そのうえ、盲目的で思慮を欠いた勇氣、そして、こうむる損失を考慮することなく、たやすく全員皆殺しへと突き進む。(中略) 戦闘の最中…そして後も、前代未聞の残忍さで、恐ろしい野蛮行為に耽

る。中国人から旅順を奪った(中略)後には、男性、女性、子どもたち、無防備な2千人の不幸な人々を殺した。台湾占領とは6万人の現地人が滅ぼされた長い殺戮なのだ。そして、1900年の天津奪取後には、「日本の署名」と呼ばれるもの、すなわち、咽喉に日本の短刀でつけられた致死的な傷を負った女性たちの死骸を、目撃証人の中で思い出さない者がいるのか。

この記述に見られるのは、日本人の残忍さであるとともに、それは先祖である「サムライ」から受け継いだ「遺伝」であるという認識である。そして、この記事が掲載されている紙面中央には、大きく「中国人の捕虜を自らの手で処刑する日本憲兵の将校」というキャプション付きの写真がある。この写真には、後ろ手に縛られ目隠しをされて地面に座る中国人捕虜2名、すでに首を切り落とされ倒れている捕虜2名、切り落とされて転がっている彼らの首、こちらを見て刀を振り上げてポーズをとる日本人将校1名、さらにこちらを見て居並ぶ日本人憲兵たちと剣や銃剣を持った中国人やインド人の兵士たちが写っている。この写真は、日本人が残忍であるという印象を持たせる極めてセンセーショナルなものである。また、上記引用の記事内容から得るイメージを強化する役割を担っている。ここにでてくる兵士たちの祖先である「サムライ」のイメージは、ジャポニスム全盛であった頃にフランスを覆っていた、西洋の騎士に重ね合わされた、遠い国の異国情緒あふれる「サムライ」ではもはやない。その底流に根強く存在していた、「暴力的で残忍」「外国人を襲う」「刀を2本持って振り回し人を殺す」イメージなのである。

「サムライ」を日本人の好戦的性格、残忍さなどと結びつける論調は、他の記事においても同様である。『ル・プチ・ジュルナル・シュプレマン・イリュストレ』(1905.4.2)では、「日本の軍事精神」と題した2ページ近くに及ぶ記事の中で、次のように記している。

日本の国民は性質からも伝統からも好戦的である。その歴史は絶え間ない戦いである。大名とサムライの封建時代の古い精神は、近代文明の影響のもとでもなくなり、逆に近代文明によって認められることになった。(中略)日本の風習は、方法や軍備は変わったが、他は何も変わっていない。もはや、大名もサムライもないが、今では国全体が戦士階級 *la caste guerrière* を構成している。この戦闘精神の結果、日本人は、死に対して、狂気にまで押し進められた蔑視を習いとする。

そして、ロシアの捕虜になることを避けて、兵士や水夫が船上で「ハラキリ」を行った1904年4月の金州丸事件を例に挙げ、「この好戦的な伝統と死をもともしない姿勢に、鉄の規律へのエネルギー、長の意志に対する盲目的な敬意が加わる」と、この記事は続けている。この記事においても、「サムライ」を「戦士」と位置づけ、それであるがゆえに、日本はその伝統から好戦的な国であるとする。そしてその上で、日本軍の兵士たちの特徴は、かつての「サムライ」から受け継いだものであるという認識を明瞭に示している。

『ル・フィガロ』(1905.5.1)には、ピエール・ロチの新たな小説『お梅が三度目の春』に関する紹介・批評記事の中で、次のような記述がある。

50年前、この小さな水夫や非常に礼儀正しい将校たち(中略)の父親は、(中略)2本の刀を持った

サムライだったのだ。このサムライたちは、風変わりな甲冑、ゆがんだ盾、悪夢のような仮面をつけたおぞましい醜い人々だった。ところで、こういった残忍で子どもじみた道具一式はまさに先祖代々続く魂なのだ。そしてまた、これらの道具は外面に現れた日本の魂で、内面にあるその奇妙な死生観、残忍で容赦のない戦いへの愛着をそこから透かして見ることができる。

この記事は、かつて、一世を風靡したロチの『お菊さん』の後日談とも言える小説に関する評である。しかし、当時、フランス人たちが称賛しこぞって買い求めた武士の甲冑や盾などに対し、正反対の評価が下されている。そして、ジャポニスム全盛の時代に、日本側もそのイメージを利用した異国情緒をかきたてる遠い国の「サムライ」の武将姿や武具は、ここではすべてもう一つの「サムライ」のイメージ、すなわち「好戦的」で「残忍」で「人を殺す」イメージとしてとらえられ、かつて併存していたイメージが今や一つとなり、「サムライ」は日本人の好戦性、残忍さを説明する根拠として示されている。

『イリュストラシオン』はどうであろうか。1905年6月24日号に「奉天の勝利後一戦死者を弔うための日本基地での祭り」と題する記事がある。そこには、記事とともに、具足をつけた武士と洋装の軍服姿の兵士の挿絵や、刀をもって戦踊りを舞う軍服姿ではない兵士たちの写真、具足をつけて行列を作って歩く兵士たちの写真などが掲載されている。そして、この最後の写真には、「戦死者を弔う仲間たちの前を行列を作って歩く“サムライ”に扮した兵士たち」というキャプションがつけられ、さらに、「ヨーロッパ風の装備を身につけた小さい兵士たちは、サムライたちの素晴らしい行列が練り歩くのを見つめていた。サムライたちの不屈の魂は、彼らの中に生き続けている」という解説がつけられている。ここにも、「サムライ」を「戦士」と同一視し、軍隊の兵士たちはその「サムライ」の「戦士」としての魂を受け継いでいるという認識を見ることができる。

引用した記事は、すべて異なる新聞に掲載されたものであるにもかかわらず、全く同じ認識を示していることがわかるだろう。これらの記事には、日露戦争で戦果を挙げる日本と日本兵たちに対する恐怖、脅威とともに、その特徴や要因を「戦う者」「人を殺す者」としての「サムライ」に求めていることを見取ることができるのである。この時期、ヨーロッパで黄禍論が盛んに唱えられたことはよく知られている²¹が、これらの記事の論調はその延長線上にあると言える。

書籍についても見てみよう。1905年に出版された『ムスメの国、戦争の国！』で著者シャルル・ペティは、次のように記している。「大名とサムライのみが国を代表していた。公には彼らは特権を失ったが、近代日本を動かしているのは、今なお彼らの精神だ²²」、「死をもともしないこと、御しがたい自尊心、輝くばかりの勇氣、(中略)残酷さへの本能、恨みの感情、ずるがしこさ、不実さ、すべての長所と短所が、日本人を全世界で最も勇敢であると同時に、最も残虐で最も恐ろしい戦士に作り上げるのに寄与している²³」。日本軍の戦士の「最も勇敢で最も残虐」という特徴は、「サムライ」の精神に由来するという、同じ論調をここにも見ることができるだろう。また、著者は、巻末で、日露戦争をはっきりとアジア対ヨーロッパの戦争と位置づけ、日本に対する脅威を明確に述べてもおり²⁴、すでに見た新聞記事とやはり論調は一致している。

このように見てくると、この時期には、「サムライ」は、かつてその美点とされた「死をもともしない姿勢」「勇氣」「自尊心」がすべて反対にとらえられ、「好戦性」と結びつけられている。そしてまた、かつてもて

はやされた武将姿のイメージもその「戦う」という面のみが取り上げられて、「人を殺す」ことを前提とした「残虐、残忍な戦士」としてとらえられていることがわかる。さらに、そのイメージがメディアを問わず、絶えず発信されることで増幅されている、ということが言える。

ところで、エンターテインメントは「サムライ」のイメージ形成に影響を与えたのだろうか。「ハラキリ」に関して言えば、1900年、1901年のパリでの川上音二郎と貞奴一座の公演および1906年のマダム・ハナコの公演がそのイメージの形成と語彙の浸透に大きな役割を果たしている。「サムライ」についても、同様の影響力があったのだろうか。

川上一座の公演で大当たりをとった演目に「芸者と武士」がある。演目名に「武士」が用いられているが、実は、この演目名のフランス語は、*La Geisha et le Chevalier*（芸者と騎士）であり、「武士」はもちろんのこと、「サムライ」も用いられていない。当時、「ハラキリ」という行為のイメージは「自らの腹を切り開く」という言い方で、すでにかなり浸透しており、この一座の公演によって一層広まった。また、語彙もすでにかなり浸透していた。しかし、「サムライ」について言うと、演目名に「騎士 *chevalier*」を用いていることから、語彙はまだそれほど浸透していたわけではないことがわかる。また、演目名が「騎士」である以上、劇中に「サムライ」という呼称も出てはこないだろうし、出てきても台詞は日本語であるから理解は困難だったろう。しかも登場人物の「サムライ」には、何らかの名がつけられている。とすれば、「サムライ」は舞台に存在はしているものの、一度目にすれば忘れない行為である「ハラキリ」とは異なり、何らかのイメージを強く印象づけ、拡散させる効果は低かっただろう。馬淵明子氏も、19世紀パリの舞台での日本男性の表象としての役割について、「女性を引き立てる役回りがほとんどである²⁵」と述べている。

また、1906年にはフランスで大評判となった女優のマダム・ハナコがいる。彼女はその「ハラキリ」と死の演技でフランスを席卷した。しかし、彼女の舞台は、本来男性が行う「ハラキリ」を女性が行う演出となっており、「サムライ」の影は薄い。

6. イメージの浸透とさらなる拡散へ

ここで再び「サムライ」の語彙と意味の定着について、フランスで発行された辞典を見てみよう。百科事典を兼ねた1898年刊行の挿絵入り大辞典『ル・ヌーヴォー・ラルース・イリュストレ』*Le Nouveau Larousse illustré*（全7巻）に「ハラキリ」とともに「サムライ」が初めて収録されたことは、すでに述べた。では、よりコンパクトで一般に流布しやすい小辞典はどうなのだろうか。

フランスで初めて刊行される小辞典は、ラルース社1889年刊行の『ディクシオネール・コンプレ・イリュストレ』*Dictionnaire complet illustré*であり1904年まで版が重ねられる。しかし、1904年版にも「サムライ」は収録されていない。「ハラキリ」が小辞典に初めて収録されるのは、1905年刊行の『ル・プチ・ラルース・イリュストレ』*Le Petit Larousse illustré*であるが、この辞典にも「サムライ」は記載されていない。また、この辞典は商業的に大成功をおさめ、多くの版を重ねて出版し続けられるが、1922年版にも「サムライ」は収録されていない。したがって、この時期には、「ハラキリ」に比べ、語彙としての認知度が低いことがわかる。ただし、同じ1922年刊行の百科事典を兼ねた2巻ものの辞典『世界ラルース 百科事典』*Le Larousse universel en 2 volumes : dictionnaire encyclopédique*には収録されている。「サムライ」の項目には、「日本の戦士階級の古い呼称」という簡単な説明が付されている。百科事典ではあるが、2巻とコン

パクトであるために、百科事典部分の説明は付けられていない。1898 年に刊行された大辞典では、百科事典部分に役割や特徴など社会的・歴史的な説明が付されていた。しかし、この辞典ではそれが無いことから、記載された説明内容から知りうることはきわめて限定される。すなわち、「日本の、今は存在しない昔の身分」であり、それは、「戦士」である、ということのみである。文化的・社会的背景は一切わからなくなっており、この語彙が以前にも増して単純化、平板化され、それによってさらに、本来のものとは異なるイメージが提供されることになったとすることができる。

また、この辞典では、「ハラキリ」については百科事典部分に 1912 年の乃木希典の殉死を例に挙げて詳細な説明が付されている。それに比べると、その扱いは極めて小さい。この記載状況は、この辞典を編纂する時点では、「サムライ」は「ハラキリ」に比べると浸透の度合いが低かったことを示しているだろう。しかし、コンパクトな辞典に記載されたことから、この語彙はかなり広まっていたことがわかる。これには、すでに見た日露戦争との関連での言及の増加を受けて、語彙が浸透していった状況がかかわっているだろう。1924 年には、新たな1巻ものの辞典『ル・ヌーヴォー・プチ・ラルース・イリュストレ』*Le Nouveau petit Larousse illustré* が出版され、やはり版を重ねるが、「サムライ」の語彙としての収録はなく、語彙の浸透状況に変化がないことがうかがえる。

1巻ものの国語辞典には、1936年、同じラルース社から刊行された『プチ・ディクシオネール・フランセ』*Petit dictionnaire français* によりやく項目として収録される。そこには、「日本の戦士」という極めて簡単な説明が記載される。「日本の戦士」という、このきわめて簡単な説明に注目しよう。1922年刊行の2巻ものの辞典の説明では、少なくとも「昔の」呼称であるということは伝えられていた。しかし、この説明からは、文化的・社会的背景だけではなく、その時代的背景も失われている。ここからは、単なる「戦いを専門とする者」すなわち「人を殺す」ことを前提としたイメージしか得ることができない。「サムライ」という語彙が内包する多くの社会的・文化的・歴史的背景は完全に消え、一層平板で一面的で、本来の意味するものとは大きくかけ離れた、歪んだイメージが付与された語となっていると言える。最もコンパクトなこの辞典への収録は、出版年から遅くとも数年前と思われる編纂時には、この語彙はフランス社会の中に浸透していたことを示す。この時期での浸透には、すでに見た日露戦争に加えその後の日本の顕著な軍事的台頭が関係しているだろう。この辞典に記載された「日本の戦士」という説明は、「サムライ」という語がその社会状況のなかで受けてきた変容を反映していると、言うことができるのではないだろうか。

しかしまた、辞典とは、語彙のその時代の意味やイメージを反映しているとともに、収録し記載することで、その意味やイメージを固定化する。そして、それを参照した人々に対し、その意味やイメージを拡散させ、社会に定着させる役割を担う。とくに最もコンパクトな辞典であれば、参照する人も多く、その影響は大きい。「サムライ」に付与された「日本の戦士」という説明は、それを参照した人々にその意味を定着させ、さらに多くの人々に拡散させたことになる。そのことを考慮するならば、「日本の戦士」という説明は、フランス人の「サムライ」にたいするイメージに大きな影響を与えただろう。

7. 終わりに

以上、日本の男性を象徴するイメージの一つである「サムライ」が、19世紀から20世紀前半のフランスにおいて、どのようにとらえられ、浸透し定着したのかを、「ハラキリ」との比較も念頭に置きながら考察

してきた。「サムライ」のイメージも、「ハラキリ」と同様に、長い時間をかけ、多くの要素が複合的に関与することによって形成されてきた、ということが明らかとなった。具体的には、第一に、新聞などのメディアによって伝えられる情報とそこでの意図的なイメージ形成、第二に、ジャポニスムの流行などに見られるようなフランス側の意図的な選択、第三に、それを利用する日本側の意図的な戦略、第四に、国際情勢とそれによるフランス側の意図的な解釈、などが作用していた。そして最後に、それぞれの時点で、辞典に記載された説明が、そのイメージを反映するとともに固定化し、さらに拡散し浸透するという構図である。

しかし、「ハラキリ」とは異なる「サムライ」の特殊性も明らかとなった。それは、まず、エンターテインメントがあまり大きく関与していないという点である。行為である「ハラキリ」とは異なり、身分である「サムライ」はエンターテインメントにおいては、多くの人に何らかのイメージを強く印象づけ、それを拡散させる効果は少なかった。さらに、最も大きな特徴は、国際情勢がそのイメージ形成に大きく関与していたことである。日清戦争や日露戦争に顕著に現れた日本の軍事的台頭から、「サムライ」に与えられたイメージは大きく変容した。すなわち、これらの戦争を機に「サムライ」は「人を殺す」ことを前提とする「戦士」と言いかえられ、かつてジャポニスム流行の時代にもはやされた武将のイメージや甲冑などは、その「戦う」という面のみが取り上げられて、「戦士」のイメージへと変容させられたのである。そして、日本人の残忍さの根拠とされて、そのイメージが広められた。このイメージの変容は辞典の記載に反映され、時代を追うごとにそのイメージは強められていった。

冒頭で、アラン・ドロン主演の『サムライ』という映画に触れたが、「サムライ」と呼ばれる金で雇われた現代の殺し屋という設定は、「サムライ」という語が持つ様々な文化的・社会的・歴史的背景を知る日本人であれば、構想しがたいものであるだろう。しかし、「サムライ」を単に「戦士」ととらえるならば、「人を殺す」ことが専門であり前提である以上、それほどかけ離れたものではないのかもしれない。

異なる文化を理解するとき、このような状況は我々の側にも起きているはずである。我々が異なる文化に関して抱いている何らかのイメージは、どのようにして作り上げられたものなのだろうか。いったいどのような要素が関与して形成されたものなのだろうか。そこには、なんらかの意図的な要素は関与していないのだろうか。正しい理解に近づくためには、常にこのことを問い続けていくことが求められるだろう。

【註】

- 1 山崎ゆき子「フランスにおける「日本」のイメージ形成－「ハラキリ」を中心に－」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要』第7号、2018、所収。
なお、本稿においては、「ハラキリ」に関しては重複を避けるため、触れるにとどめ詳述しない。この点に関する詳細については、上記拙稿を参照されたい。
- 2 この語の綴りについては、samurai と表記される場合もあるが、本稿では区別せずに扱う。
- 3 『イリュストラシオン』の1843年から1905年までの記事は、横浜開港資料館編『イリュストラシオン』日本関係記事集』第1巻：1843 - 1880(1986)、第2巻：1881 - 1903(1988)、第3巻：1904 - 1905(1991)、横浜開港資料館、を使用している。
- 4 例えば1865年は2月19日号、4月6日号、9月3日号、さらに、1866年は2回、67年には5回。

- ⁵ Edmond de GONCOURT, *La Maison d'un artiste I*, in *Œuvres complètes XXXIV-XXXV*, Edmond et Jules GONCOURT, Slatkine Reprints, 1986, pp. 186-188. ミットフォードの『昔の日本の物語』*Tales of old Japan* の中で紹介された「忠臣蔵」は、1871 年にフランスで出版された『世界一周散歩』*Promenade autour du monde* (M. le Bon de Hübner, Hachette) でほぼそのまま転載され紹介されている。そこでは、「サムライ」は「ハラキリ」の語とともに用いられ、「古き良き日本」の「サムライ」の忠義の精神が示される。
- ⁶ Edmond de GONCOURT, *La Maison d'un artiste II* in *Œuvres complètes XXXIV-XXXV*, *ibid.*, p.234.
- ⁷ Pierre LOTI, 《Au Tombeau des samourais》in *Japoneries d'automne*, Calmann-Lévy, 1889, p.260. この作品は、出版前の 1888 年に、『ル・モンド・イリュストレ』11 月 10 日号に未発表作品として《Les Tombeaux des samourais》というタイトルで、挿絵とともに掲載されている。
- ⁸ *Ibid.*, pp.268-269.
- ⁹ Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *Essai sur l'histoire du Japon*, Plon, 1899, pp.246-247.
- ¹⁰ *Ibid.*, pp.238-246. この部分の内容は新渡戸稲造の『武士道』にかなり類似しているが、ラ・マズリエールの著作の出版は 1899 年 5 月、『武士道』の出版はアメリカで 1899 年 12 月であるので、ラ・マズリエールが参考にしたとは考えにくい。
- ¹¹ 起立工商会社に関しては、木々康子『林忠正—浮世絵を越えて日本美術のすべてを—』、ミネルヴァ書房、2009、に詳しい。
- ¹² 2018 年 10 月 17 日から 2019 年 1 月 14 日までフランスのギメ・アジア芸術博物館で開催された特別展《Meiji: Splendeurs du Japon impérial (明治: 帝政日本の逸品)》では、1880 年頃の日本で制作された作品として、このような武将の図柄をあしらった皿が展示されている。また、同様の図柄の皿は、いろいろな美術館で所蔵されているとの説明が付されている。さらに、19 世紀の作品として、やはり同じような武将の図柄のゴブレットや、パリ万博に出品された可能性が高いとされる、武将の姿をした須佐之男命が八岐大蛇と戦う図の屏風、輸出用に制作されたことが明らかな高さ 2 メートル以上の武将の一对の像などが展示されている。Cf. Sophie MAKARIOU et Nasser D.KHALILI (dir.), *Meiji : Splendeurs du Japon impérial*, Musée national des arts asiatiques — Guimet / Lienart Editions, 2018, pp.166, 203, 215.
- ¹³ Gregory IRVINE, 《L'Essor du japonisme》 in *Meiji : Splendeurs du Japon impérial*, *ibid.*, pp.157, 160.
- ¹⁴ Claude ESTEBE et Jérôme GUESQUIERE, 《La Photographie à l'ère Meiji》 in *Meiji : Splendeurs du Japon impérial*, *ibid.*, p.102.
- ¹⁵ Marquis de la MAZELIERE (Antoine Rous), *op. cit.*, pp.236, 247.
- ¹⁶ Harry ALIS, *Hara-Kiri*, Paul Ollendorff, 1882.
- ¹⁷ *Le Figaro*, le 23 juillet 1891.
- ¹⁸ Jean DARGENE, *Arc-en-ciel — roman du néo-Japon*, Léon Chailley, 1895, p.103.
- ¹⁹ *Ibid.*, p.105.
- ²⁰ 1905 年 4 月 2 日号。
- ²¹ フランスでは『イリュストラシオン』1895 年 11 月 16 日号掲載記事「現代日本のスダレの陰で」のなかで、「黄禍 un péril jaune は存在し、それは日本にある」とすでに記されている。また、1905 年 6 月 24 日号では、「黄禍」と題する記事を掲載している。書籍でも、1904 年には、『黄色人種対白色人種: 日露戦争に関する冒険小説』、1905 年には、『黄色人種対白色人種』など次々と刊行され、日露戦争あたりから「黄禍論」は特に盛んになる。
- ²² Charles PETTIT, *Pays de mousmés, pays de guerre !*, Juven, 1905, p.199.
- ²³ *Ibid.*, pp.199-200.
- ²⁴ *Ibid.*, pp.246-252, 285-288.
- ²⁵ 馬淵明子『舞台の上のジャポニスム: 演じられた幻想の〈日本女性〉』、NHK 出版、2017、p.26.